「袋の中の免許証」

「お前に俺の気持ちがわかってたまるか。」
Kさんの怒鳴り声が響いた。Kさんが怒るのには理由がありました。
Kさんは昭和13年O町の被差別部落に生まれました。苦しい生活をなんとかしようと両親は朝から晩まで行商をし、家にいるのは寝るときくらいでした。Kさんが小学校入学をむかえても生活苦で学校に行かれませんでした。だからKさんは文字を勉強することができなかったのです。
中学には入りましたが、文字を勉強していないKさんは、学校に行く気になりませんでした。しだいに学校から足が遠のいていきました。

中学をなんとか卒業したKさんは、建設関係の仕事に就きました。仕事を始めてから数年経つと遠距離の現場の仕事も任されるようになりました。しかし、Kさんは車を使って遠くの仕事に行くことができません。Kさんは文字を知りませんから免許をとるための勉強ができなかったのです。仕方なく遠距離の仕事は同僚に「車に乗せていってくれ」と頼むのです。しかし、約束をしていても来ないときもありました。普通に働いていても家族を養うのに十分とはいえない状態でしたので、一回仕事を休めばその分収入が減り生活が苦しくなります。Kさんにとってはただ約束を守られなかっただけの問題では済まないのです。そんなとき、迎えに来なかった仲間より、免許がない、文字を知らない自分にKさんは腹が立ちました。
そんなイライラがたまる中で、妻に話しかけられたり助言されたりすると、Kさんはついつい大きな声を出してしまうのです。

「Kさん、また大声出しているよ。」「Kさん今のままじゃいけないねぇ。」　近所ではそんな話をするようになりました。しかし、周囲の人たちのそんな自分を見る目をKさんは敏感に察していました。そして、ますます素直になれず、そのイライラした気持ちは一番近くにいる妻へと向かってしまうのでした。そんなKさんを一番嫌に思っていたのは実はKさん自身だったのです。そして、そのことを一番よくわかっていたのは妻でした。
「Kさんが免許を取れたら、Kさんが文字を知っていたら、Kさんが変わるのに。」
Kさんに免許を取らせよう、Kさんが文字を勉強する場をつくろうと、同じ被差別部落の人々が町へ要請して、昭和51年O町に識字学級をつくりました。Kさんだけではなく、被差別部落の人々がお互い差別に負けない学力をつける場でもありました。だから、識字学級では文字を習うことはもちろん、部落差別問題についての本の読み合わせもしました。ところが文字を知らないKさんにとってはそれが耐えられないことだったのです。
「Kさん、識字学級へ行こう。」
「俺は行かない。」

「一緒に勉強しよう。」
「行きたくねぇんだよ。ほっといてくれ。」
Kさんは妻の顔を「きっ」とにらみ、怒鳴りました。

12月のある冬の日のことです。その日はO中学校の教頭先生が識字学級の指導者でした。雪の中識字学級に来たのはKさんの妻ただ一人でした。
「誰もいないのかぁ。…そうだ、これはチャンスだ。」
妻は急いで家に戻り、Kさんを説得しました。
「今日は誰もいないよ。人の目を気にしなくていい。一緒に識字へ行こう。」しぶるKさんを説得し、識字学級へ連れて行きました。
初めての識字学級です。Kさんの前にはひらがなの練習本がおかれました。しばらく本に書かれているひらがなをじっと見つめていたKさんは、ゆっくり鉛筆を握ると、一文字一文字鉛筆が折れるかと思うくらいの力を込めて練習本にある文字の形を書きました。12月だというのに、たちまちKさんは汗びっしょりになり、シャツ一枚で文字を書きました。

この日からKさんは欠かさず識字学級に通いました。しかし、文字を覚えるのは簡単ではありません。しかも、Kさんの場合は文字を覚えるというだけではなく、免許を取得するという目標もあります。ひらがな、漢字、車の構造と覚えることは山ほどありました。「このままでは免許が取れない。」と思ったKさんの仲間たちが頼み込んで、昼間はA先生からひらがなを、自動車教習所のH先生から車の構造を特別に教えてもらいました。夜は近所の人たちが代わる代わる講師になり、Kさんにその日覚えた内容を確認させることをしました。
Kさんも必死に勉強をし、2年後ようやく免許取得の為に自動車教習所に通うことになりました。教習所の教本にはKさんの知らない漢字がたくさんあります。その漢字に妻が丁寧に一つ一つかなをふりました。それを読みながらKさんは言葉を確認し勉強を進めました。
人が1時間で読み終える内容もKさんは3時間も4時間もかかります。Kさんは寝る間も惜しんで勉強をしました。しかし、試験にはなかなか受かりません。途中一度だけ「俺、もうやめる。」と当時親しくしていたS建設の社長さんに相談しました。「われ、そんなことでどうするんだ。生活は、子どもはどうするんだ。」と、社長さんはやさしく励ましました。気を取り直し再び勉強を始めました。試験を受ける、落ちる、受ける、落ちる。幾度となくそんなことが続き13回目の試験でKさんは念願の運転免許証を手に入れました。文字を覚える学習をはじめてから5年の歳月が経っていました。教習所の先生から手渡された免許証を両手でうけとったKさんは、それをそっと袋の中に入れ、かばんの中にしまいました。